レイアウト伝達演習によるコミュニケーション能力向上の取り組み

竹内　一
徳島文理大学香川薬学部

１．はじめに

コミュニケーション能力は、高等教育で育成すべき資質の１つであり、多くの産業で必要とされる能力と見なされている。薬学教育においても、薬剤師として求められる基本的資質の 1 つにコミュニケーション能力が挙げられており、薬学生がそれを身につけられるようなカリキュラム編成とすることが大学に求められている[1)]。しかし、薬学教育においてコミュニケーション能力を向上させるための具体的な方法は未だ手探りの状態であり、エビデンスに基づいた教育方法が求められている。そもそも、大学教育において育成すべきコミュニケーション能力の定義には、様々なものが存在する。本研究では、コミュニケーション能力を説明能力と聞き取り能力の 2 つに絞り、これらをトレーニング、評価することを目的とした「レイアウト伝達演習」を考案した。この演習を薬学生に対して実施し、その結果を基に演習の効果を検討した。

２．方法

(1) 対象

徳島文理大学香川薬学部に在学中の 1 年生 48 名と 5 年生 59 名を対象とした。

(2)「レイアウト伝達演習」実施方法

演習は 2 人 1 組で行う。片方が「説明者」、もう片方が「解答者」となり向かい合って着席する。説明者は、正面(解答者の背後)に映写された複数の図形が配置された図を見て、そのレイアウトを解答者に対して口頭で説明する。説明時間が終了後、解答者は説明された内容に基づいてレイアウトを用紙に記入する。ペアになった学生が説明者と解答者をそれぞれ1回ずつ交代して行って1セットとし、これを 5 セット実施した。使用される図には、○、×、△、□の 4 種類の図形のいずれかが合計 4 個描かれている(図 1)。伝達結果は、記入された図形の種類、個数、位置、大きさの 4 項目をそれぞれ 0～2 点でスコア化し、合計スコア値が最大 8 点となるようにして評価した。

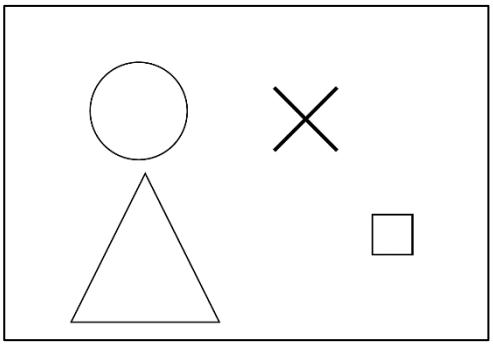

図 1 演習で用いたレイアウトの一例

(3) アンケート調査

本演習の参加者を対象に事前および事後アンケートを実施した。事前アンケートの設問内容は、説明能力と聞き取り能力に関する自己評価(4 問; 5 件法)である。事後アンケートの設問内容は、説明能力と聞き取り能力の向上に対する本演習の効果(4 問; 5 件法)である。

(4) 倫理的配慮

本研究は徳島文理大学倫理審査委員会の承認を得て実施した(承認番号 R3-8)。参加者に対しては、事前に研究概要、方法、参加の有無や結果は成績評価に全く関係しないこと、本研究で収集された情報は匿名化され、個人が特定されない形で分析されることを口頭および文書で説明して同意を得た。

３．演習およびアンケートの結果

(1) レイアウト伝達演習の結果

1 年生の合計スコア値は、3 セットの繰り返しで 88%が 6 以上となり、5 セットでは 90%が 6 以上に到達した。5 年生に対して実施した結果でも、3 セットの繰り返しで 93%が合計スコア値 6 以上となった。1 年生の場合、図形の種類、個数、位置の個別スコアは繰り返すことによる変化がほ

とんど見られなかったが、大きさについては、1セットから 3 セットにかけてスコアが増加する傾向がみられた(図 2A)。一方、5 年生の場合には 3 セットまでの繰り返しにより全ての評価項目のスコアが増加する傾向がみられた(図 2B)。

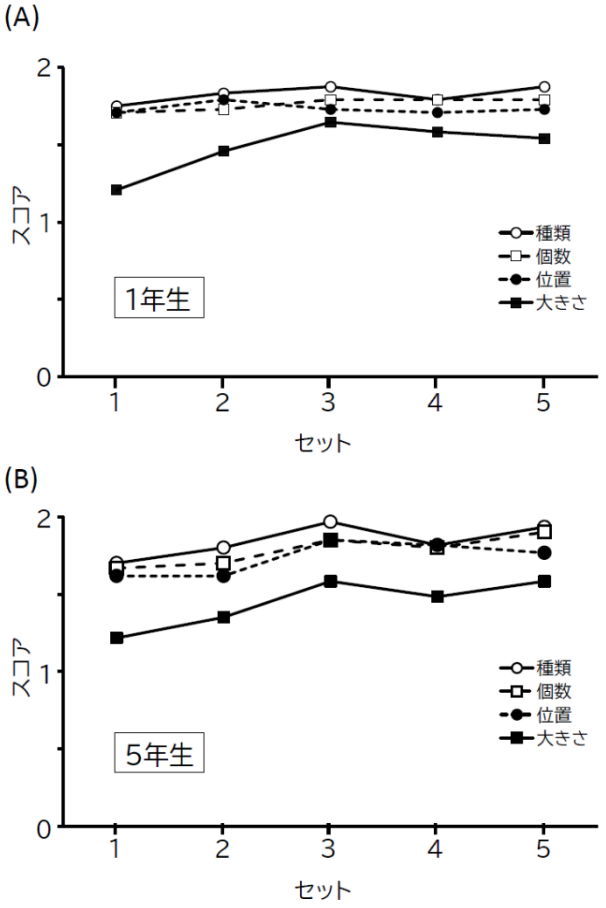

図 2　レイアウト伝達演習結果
(A)1 年生　(B)5 年生

(2) アンケート結果

演習の前にコミュニケーション能力を自己評価するアンケートを行った。その結果、50%の 1 年生は、一般的な物事であれば初対面の相手に 70%以上を説明できる、また 63%が初対面の相手の話す内容を 70%以上は理解できると認識していた。これは 5 年生でも概ね同じ割合であった。演習終了後に、今回の演習に説明能力がどの程度必要であったかという問いに対して、96%の 1 年生および 95%の 5 年生が絶対に必要あるいはかなり必要と回答した。また今回の演習に聞き取り能力がどの程度必要であったかという問いに対しては、98%の 1 年生および 93%の 5 年生が絶対に必要あるいはかなり必要と回答した。今回の演習を繰り返すことで説明能力が向上したかという問いに対しては、33%の 1 年生および 25%の 5 年生が非常に向上あるいはかなり向上したと回答した。聞き取り能力に関しては、39%の 1 年生および 27%の 5 年生が非常に向上あるいはかなり向上したと回答した。一方、2%の 1 年生および 5%の 5 年生が説明能力や聞き取り能力に全く変化がなかったと回答した(図 3)。

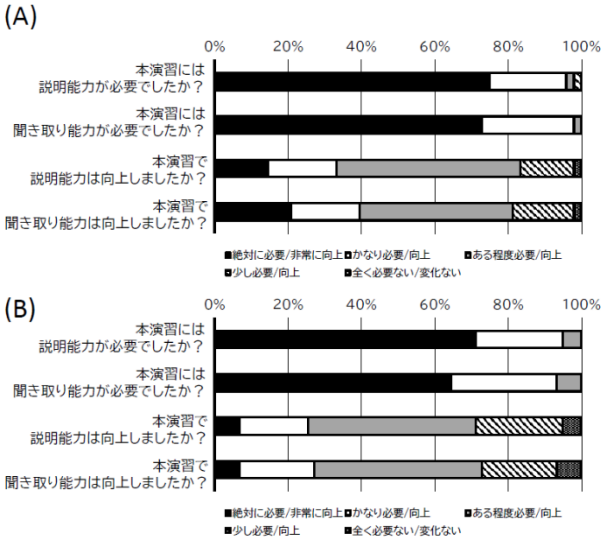

図 3　演習後のアンケート結果
(A)1 年生　(B)5 年生

４．考察

「レイアウト伝達演習」は、特別な設備が不要で実施時間が非常に短くフィードバックも容易であることが特長である。アンケート結果からも、本演習には聞き取り能力や説明能力の活用が必要であり、繰り返すことでこれらの能力がある程度向上するとの意見が得られた。また、5 セット繰り返すことで 90%以上の受講者の合計スコア値が上昇したことから、本演習はコミュニケーション能力のトレーニングとして有効である可能性が推測された。また、1 年生と 5 年生で大きな差が見られなかったことから幅広い学年を対象にできる可能性も見出された。今後はより変化を検出しやすい評価方法と適切な難易度調整の方法の確立が必要となると考えられる。

５．引用文献

1) 文部科学省：薬学教育モデル・コアカリキュラム(平成 25 年度改訂版)，2013